

簿記・会計教育における体験学習の新手法

～仮想企業によるアクティブ・ラーニングの実践～

永 野 篤

(キャリア開発総合学科)

I. 目的

簿記・会計の学びへの需要が高まる一方で、苦手意識を持つ層が多いことが課題となっている。本研究では、企業経営の仕組みを楽しみながら理解できる新たな学習手法を提案し、その普及を目的としている。

簿記学習の主な障壁の一つに、「借方・貸方」の理解が挙げられる。これが学習意欲を低下させる要因とされることから、本研究ではこの課題に対処するため、取引処理を「現金」に集約する方法を導入した。この手法では、現金が増えた場合は左、減った場合は右に記入し、次に対応する売上や仕入を反対側に記録する手続きとした。また、掛取引については、「後で受け取る」「後で支払う」という説明を加えた上で、売掛金や買掛金として記録する。このアプローチにより、取引処理が自然に身につく、現金を介さない取引の利便性やリスク、さらにキャッシュフロー経営の重要性についても理解が深まることが期待される。

授業では、架空の会社を設立するアクティブ・ラーニングを取り入れている。学生を社員に見立て、社長や株主をフィギュアで表現し、事業計画を作成した後、株主の承認を得ておもちゃの紙幣で資本金を出資する形式で進行する。その後、商品や固定資産の購入、ビジネスの運営を行い、決算後には株主への配当を目指す。このように、学生が主体的に簿記・会計を学べる仕組みを構築している。

本学科は地域総合科学科として、地域のニーズに応える人材育成を目指しており、多くの卒業生が地域企業へ就職している。そのため、経営に必要な決算報告書や会計情報の重要性を理解することが不可欠である。簿記は取引記録を通じて経営全体を把握するための基本的な枠組みであり、こうした知識を持つ人材を地域へ輩出することは本学の重要な使命となっている。本研究では、簿記学習における苦手意識を払拭する具体的な解決策を提示し、簿記・会計・経営に関する学びの課題解決を目指している。

II. 方法

簿記・会計の学びを取り巻く状況を明らかにした上で論点を整理し授業を企画し、実施したうえでの結果を基に考察を行う。具体的には、最初に簿記の資格・学習が求められていることをウェブサイト上の最新情報から明らかにし(Ⅲ-i)、次に学ぶ上での弊害が存在している状況を先行研究から確認する(Ⅲ-ii)。さらに社会状況など踏まえつつ市販のテキスト・学習教材の内容のトレンドを確認する(Ⅲ-iii)。そのうえでテキスト類の特徴と学生への指導経験を踏まえ授業を企画し(Ⅲ-iv)、実行の上、結果を明らかにし(Ⅳ)、考察(Ⅴ)し、今後の課題を整理した(Ⅵ)。

Ⅱ（ⅰ）簿記・会計資格取得への期待

簿記会計の知識や資格は、現代社会で高い需要があり、その意義が明確である。多くの資格ランキングで上位に位置づけられ、幅広い評価がある。「社会人におすすめの資格ランキング！転職やキャリアアップに有利な資格25選【2024年】」では、簿記は宅地建物取引士や行政書士、MOSなどに次ぐ6位にランクインしている。「実務で役立つ経理・会計の知識を身につけた存在」として、時代に左右されない汎用性の高さが説明されている。また、「2024年版！就職に役立つ資格・検定ランキングTOP30」では簿記が1位に選ばれ、「リスクリングに役立つ資格ランキング」でも3位である。

さらに、簿記の学びは就職活動でも評価される。「就活に強い資格10選」では、TOEICに次ぐ2位に位置づけられ、「企業の財務諸表の見方を学べ、経理職で即戦力となる」と説明がある。また、「就職に有利な資格ランキング」では3級以上が3位にランクインし「決算書を作成し、企業をお金の面から分析する力を得られる」と解説がある。

これらの評価から、簿記は経理の専門知識だけでなく、会計理解や企業分析のスキルを養い、新卒や社会人問わず汎用的な知見として高く評価されている。そのため、簿記の学びは実務やキャリア形成において非常に重要な位置を占めているといえる。

Ⅱ（ⅱ）簿記・会計学習に伴う隘路

簿記資格の取得は企業社会で重要視されているが、「少子化による大学進学率の高まりに反して、会計を進んで学習することを選択しない若者の増加が指摘されている」（p39 河合）との調査がある。この現象の背景や解決策、学問としての課題について考察することは重要である。日本の高等教育における会

計人材育成には、産業人材としてのジェネリックスキル醸成と高度な会計能力向上の二側面が存在するとされている。若者の知的好奇心や学習意欲を刺激し、会計の知識や能力を育て、社会に送り出すことが高等教育機関に求められる役割である。経営・経済系の大学生は、簿記を履修し、日商簿記検定3級の内容を基にした教材を使用することが多い。教材は記帳や仕訳の習得に重点を置き、財務諸表作成を重視する内容とはなっていない。このような教育体系は、簿記への関心を持つ学生が基盤としつつも、「簿記に関心や興味を持ってない学生や苦手意識を抱く学生が増加している」（河合 p39-40）ことが問題となっている。

一方で、学習者の目的によって感じる難しさには違いがある。興味を持つ学習者は簿記の主要な概念を難しいと感じにくく、資格取得を目指す学習者も一部を除いて難しさを感じにくい。一方で、単位取得を目的とする学習者は多くの項目で難しさを感じる傾向がある。「決算と財務諸表に関しては1%水準で有意な結果」（河合 p57）が示すように、単位目的の学習者にとってこれらは特に負担が大きい。このように「簿記学習に対するやる気・意欲」が学習への取り組みに与える影響は大きい。

やる気や意欲を持つ学習者は簿記の有用性を強く認識しており、教材に実践的な内容を取り入れることが意欲を持続させるうえで重要である（河合 p66）。他の調査では、試算表や勘定科目などが理解しにくいポイントとして挙げられ、成績向上のためには授業出席や自宅学習、段階的な学習が有効とされる（手島 p50-51）。教授側の工夫としては、初学者向け用語集の作成や具体的事例の提示が関心を高める効果を生み出しているという事例も存在する（小山 p6）。それでもなお、学習者

の減少傾向は続いている。「会計知識の専門性を高めたい若者や資格取得レベルでの知識を持つ人材が減少している」（曾場 p212）一方で、検定直結の教材を用いた学習が優先され、理論的内容に基づく教育が敬遠される傾向が顕著である。特に、初学者が経験者との差に萎縮するケースも見られ、「会計をもっとわかりやすく学べるツール」が必要とされる（曾場 p215）。

さらに、簿記と会計の関係性の曖昧さも課題である。簿記教材では財務諸表作成が決算手続きの一部とされ、簿記の目的が財務諸表作成に限定されているように扱われる（河合 2p99）。簿記は本来「財産管理」に主眼を置くべきであるが、現状では財務諸表作成プロセスとしての役割に偏っている。このため、簿記学習が学習者や教授者にとって発展性を感じにくい状況が生じている。

社会人と学生では会計への意識に違いがある。社会人は会計に対してポジティブな意識を持つ割合が高いが、実務経験の影響で「わからない」という回答が増加する傾向も見られる（曾場 p217）。会計との接触機会の有無が関心度に影響を与えることが明らかとなっている。

最後に、簿記学の発展可能性はその深化だけでなく、周辺の学問領域への影響力にも依存する（角谷 p8）。簿記教育が役割を再定義し、学術的・実務的に魅力を持つ形での発展が求められている。

Ⅲ（Ⅲ） 学習教材・テキストの現状

簿記・会計への学びの需要があることを背景に数多の教材が執筆・出版されている。簿記と会計は密接に結びついており、会計と経営も密接な関係がある。また、1990年代後半から2000年初頭にかけてバブル崩壊そして不良債権問題が発生した。同時期、日本の

会計の仕組みを国際基準に適合させていく会計ビックバンが、企業統治や経営の在り方に大きな影響を与えた。このような状況を踏まえ簿記系、会計系、経営系からいくつかのテキストを紹介しそれらの特徴について整理する。

Ⅲ（Ⅲ） a. 簿記系テキスト

『簿記教科書〔再訂版〕』は、初版が1956年、再訂版が1987年の比較的古いテキストである。第1章「総論 簿記と貨幣金額による計算」では、簿記の目的を「企業などの経済活動を記録し、計算すること」とし、簿記が取り扱う数値は貨幣金額である理由を「すべての財貨を共通の尺度で計算する必要があるから」と説明している（p5）。本書は、第8章までで決算書作成までの流れを解説し、第9章から19章では仕訳や勘定科目の論点を取り上げる。基本的な枠組みは現在の資格対策テキストと大きく変わらないが、当時の学術的観点を重視した内容が特徴である。

一方、『超図解ビジネス仕訳と勘定科目入門』は、簿記検定に特化せず、会計の観点から勘定科目を解説している。1990年代後半から2000年代の日本の会計基準の国際化を背景に、有価証券評価損益など現代的な項目を取り上げている。これに対し『ファーストステップ会计学』は、税効果会計を含む会計理論を中心に据え、簿記と会計の相互作用が浮き彫りとなる内容である。これらの書籍では、簿記と会計の境界が曖昧化する傾向が見られる。

『近代会計と複式簿記』は、簿記と会計を切り離しながらも、複式簿記が現代会計と密接に関係していることを強調している（p1）。こうした学術的志向に対し、新書『会計の時代だ』では、簿記の目的を「財産管理」に位置づけ、財務諸表作成はあくまで副次的役割

であると述べている (p24-25)。

資格対策本では『TAC よくわかる簿記シリーズ 合格テキスト 日商簿記3級』が、簿記の基本から決算整理、財務諸表作成までを体系的に解説している。初学者向けに商品売買や仕訳の基本を詳細に説明し、分記法や三分法などの実践的な内容を含んでいる。同じTACの『みんなが欲しかった簿記の教科書 第11版』では、簿記学習を「業績や利益を計算し、株式投資に役立つ知識」と位置づけ、資格試験向けの具体的な解説を展開している。これらのテキストは、資格取得を目指す読者に向け、実用性を強調する内容が特徴である。

このように、簿記関連の著作は、学術的なものから資格対策本まで、目的や視点によって力点が異なる構成となっている。学術的な解説を重視するものは簿記と会計の理論的関係を掘り下げる一方、資格対策本では初学者が実務で役立てられるよう、具体的な方法論に焦点を当てている。この多様なアプローチにより、簿記の役割や意義が広く論じられている。

Ⅲ (iii) b. 会計系テキスト

『明解図解これを知れば『決算書のウラ』が読める！簿記の本質』では、第1章で簿記の目的を決算書作成とし、会社を「利益を得る仕組み」であり「株主のもの」と説明する (p14-18)。ビックバン時代を背景とし、株主や利益という観点が強調されている。また、貸借対照表と損益計算書の関係を解説 (p50-51) し、2章以降では会計帳簿から決算書作成、期中取引と仕訳、決算手続き、決算書の活用方法まで網羅している。

『完全図解行動会計』は、経営を「資本金という名のお金を回転させ、利益を生み出す作業の繰り返し」と定義し (p14)、会計の

歴史、財務諸表（貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー計算書）の役割 (p16-22) を解説する。戦略会計として損益分岐点分析を提唱し、さらに「見る目を養う」として財務会計の視点を提示する。本書は簿記や仕訳には触れず、経営や行動につなげる実践的な内容である。

『世界一楽しい決算書の読み方』では、「最短で決算書を読む力をつけるには、実在する企業の決算書を読むのが一番手っ取り早い」とし (p4)、メルカリやブックオフグループHDなど、多数の企業を比較している。決算書の枠組みの解説は少ないが、経営戦略やマーケティング視点の内容が特徴的である。

『会計の地図』は、難解な会計用語を「貸借対照表と損益計算書をつなぐ一枚の図」によって視覚化し、理解を容易にすることを提案している。複雑な用語として、借方・貸方、売掛金、損益計算書などが挙げられ (p8)、初心者に向けたアプローチを採用している。

『世界一やさしい会計の教科書』は、公認会計士である著者・登川が、簿記的内容を抑えつつ、会計や決算書、投資分析に重点を置いている。本書は、授業「簿記会計学」で使用される参考書として学生に提示している。

『決算書がスラスラわかる 財務3表一体理解法』は、取引の連続性を通じて学ぶ内容で、資本金300万円の会社設立から、在庫や減価償却費、法人税の計上、配当までを「体験」できる構成 (p4-19) である。貸借対照表と損益計算書の変化を連続的に示し学習効果を高めている。

これらの書籍は、会計や簿記、決算書の意義を多角的に伝え、それぞれの対象読者に応じた内容と工夫が特徴である。

Ⅲ (iii) c. 経営系テキスト

経営と会計は密接に結びついており、MBA

や中小企業診断士の学習でも会計や財務が重要視される。バランススコアカードでは、「財務」「顧客」「社内プロセス」「学習と成長」の視点が重視され、特に「財務の視点」は株主の視点から財務状況を精査するという特徴がある。稲盛和夫著『実学』では、会計の本質を問う姿勢を示し、利益よりもキャッシュフローを重視している。また、『ドロッカーと会計の話をしよう』では、キャッシュフローや管理会計の重要性を論じている。簿記学習者が経営的視点を取り入れることで、会計の枠を超えた洞察が得られ、実務的な知見が深まる。

Ⅲ (iv) a. 研究への準備

本研究に至る過程は次の通りである。筆者は2019年、学科全学生の必修科目「キャリアデザインⅢ」の共同授業において、P.F.ドロッカーの著作から経営者に求められる重要な資質を紹介した。しかし、アンケート結果から、多くの学生にとってマネジメントや経営の概念は抽象的で、具体的なイメージが湧きにくかったことが判明した。そこで、資格取得や既知の情報に結びつく内容を通じて経営を学ばせることが有効ではないかと考えるようになり、会計と経営を結び付ける授業構想が生まれた。

2023年2月、筆者は集中授業科目「現代会計と企業経営」を新規開講した。本授業では『世界一楽しい決算書の読み方』の内容に近いアプローチを取り入れつつ、学生自身が選択した企業の決算書を用いて評価を行う形式を採用した。当初、貸借対照表や損益計算書を複合的に分析する段階には至らなかったが、学生の真摯な取り組みが見られたことで、簿記・会計と経営を結び付ける授業の可能性が拓けた。

さらに、2022年末には「日本語と英語で

理解する簿記会計の原理」の集中授業を計画し、2025年2月に開講予定とした。経済のグローバル化が進展する中、財務情報を英語で理解し発信する能力の必要性が高まっている背景がある。この動向は2024年2月、東京証券取引所が2025年度からプライム市場上場企業に対し、財務諸表を英語で開示する義務化を発表したことで現実化した。

2024年度には「簿記検定Ⅰ・Ⅱ」の日商簿記3級対応に加え、2級レベルに対応する「簿記検定Ⅲ・Ⅳ」を設置し、より高度な簿記学習の場を整備した。同時に、2024年8月には「日商簿記CBT対策講座」を新規開講、後期授業「簿記会计学」も自らが担当することにした。この「簿記会计学」では従来の日商簿記3級程度の内容を拡張し、会計的領域を広げた内容に調整した。

2024年8月から2025年2月にかけて筆者が担当する授業は、以下の通り整理される。「日商簿記3級CBT対策講座」（集中講座、90分×8回）、「簿記会计学」（90分×15回）、「現代会計と企業経営」（90分×8回）、「日本語と英語で学ぶ簿記会計の原理」（90分×8回）。「簿記会计学」では、「簿記検定Ⅰ」や「日商簿記3級CBT対策講座」修了者のほか、簿記未経験者も受講するため、多様なレベルに対応する必要があった。そのため、テキストの確認や精査を進めるとともに、在校生への個別指導を通じて、仕訳や勘定科目の理解が記憶に頼った曖昧なものであることが判明した。これを改善するため、原理原則の理解に基づいた指導方法の重要性が明確となり、本研究の基盤となった

Ⅲ (iv) b. 授業計画（教授上の要点）

昭和時代の簿記テキストは、仕訳や帳票類の図を中心に部分的に赤色が使用されている程度で、イラストや図がほとんど見られな

かった。しかし、平成以降のテキストは、多様なフォントやカラフルな図・イラストを取り入れ、より視覚的な工夫が施されている。特にTAC社のテキストでは、著者がTAC名義の場合はオーソドックスな内容だが、滝沢著作のように個人名義のテキストでは株式投資への応用など話題が多様化し、イラストや図表も豊富に使用されている。

ただし、いずれのテキストも「簿記を学ぶこと」を起点としており、目的を決算書の作成に置いている。その構成は、資産・負債・資本（純資産）・収益・費用という「簿記の5大要素」の解説に始まり、仕訳の説明、決算整理を経て決算書作成へ進む。しかし、学習者にとっては、これらの5大要素や勘定科目の理解と記憶が障壁となっている。ヒアリングによると、多くの初学者は序章を流し読みしており、5大要素の概要を十分に理解しないまま、仕訳作業を機械的に行う傾向がある。

こうした課題に対し、筆者は以下の学習方針を提案した。覚えるべき原則を一つに絞り、仕訳はすべて現金取引と仮定し、現金が増えた場合は借方（左）、減った場合は貸方（右）に記入する。例えば、売掛金が左右のどちらかを覚えるのではなく、売ったからお金が増えるので「左」に「現金」と一旦書く。しかし、掛けで後からお金を受け取るから「現金」を書き換え「売掛金」とする。このような作業により学習者が記憶に頼らず仕訳を理解できるようにした。

また、指導方針として次の3点を重視した。(a) 日常的な用語を使用する、(b) 専門用語を必要最小限に留める、(c) 用語や概念を実物に結び付け、株主や経営者といった実在性を意識させる。さらに、グループ作業を通じて自主性を促進し、都度考えるプロセスを大切にするすることで、単なるパターン記憶に頼らず、用語や概念を声に出して徐々に理解を

深める学習方法を提案した。

IV (i) 「簿記会计学」実行

本授業は1コマ90分で構成され、1回あたり15名程度、2コマ展開で実施し合計30名程度が参加した。学生は5名ずつのグループ（仮想の会社）に分かれ、以下のステップで学習を進めた。回数ごとの構成は次のとおりである。

1回目 経営組織の構成

授業は、学生たちが起業し、会社を構成するプロセスから始まる。グループごとに社長（経営者）となるキャラクターを選択し、学生たちはそのキャラクターの下で社員として活動する。今回は「おぼんちゅうさぎ」「ハローキティ」「鬼滅の刃の竈門炭治郎」の3体から社長を選び、それぞれのグループで社名を決定した。

次に市場から購入可能な商材や資材（たこ焼き、ハムサンド、トランペット、タクシー、ブルドーザーなど）（写真1）が提示され、各グループはビジネスの方向性を議論した（写真2）。投資家役のフィギュア（例：アイアンマン、トイ・ストーリーのウッディ、ワンピースのモンキー・D・ルフィ）にプレゼンを行い（写真3）、各投資家からおもちゃの紙幣で30万円分の出資を受け取り授業がスタートした。



写真1 購入可能な商材や資材



写真2 ビジネスの方向性を議論

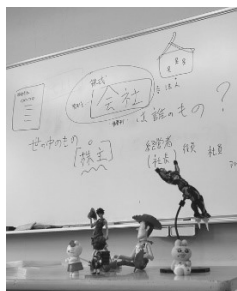


写真3 投資家へのプレゼン

2回目 物品購入と記録

1～5回目の授業では、現金で商材や資材を購入する計画を立て、それに従って取引を実施した。物品の単価は1万円とし、グループはじゃんけんで順番を決定となる。他社の購入状況によって計画変更が必要になる場合もあった。これにより、計画通りにいかない現実の経済活動を体験させた。記録方法は仕訳に基づく正式なものではなく、学生が理解しやすい簡易的な形式で行った。

3回目 自由取引の実施

6～10回目の取引では、選択肢を拡大し、①市場からの購入、②市場への販売、③他社への販売、④他社からの購入の中から自由に選択できるようにした。他社との取引は交渉を伴い、合意した価格で進めた。販売やサービス提供による収益、運搬や燃料費などの費用が発生し、グループ内で意思決定を行う過程で経営的な思考を養った。

4回目 仕訳の実施

これまで記録してきた取引内容を、複式簿記の仕訳に則った形式に変換した。専門用語（借方、貸方）は使用せず、「左」「右」といった直観的な表現を用いた。例えば、起業時の出資金は「左に現金、右に資本金」と記載。起業準備費用（例：1万円の創立費）についても、販売用物品は「仕入」と記載する一方、車両や調理器具など固定資産の物品は安易に「仕入」とせず、「車」「調理器具」など他の名称で分類していくルールを学んだ。

5回目 簿記と仕訳の目的の解説

複式簿記の意義や、貸借対照表と損益計算書との役割と関係を説明した（写真4）。売掛金が発生した場合の処理や、利益額と現金残高が一致しない理由、そして現金残高が貸借対照表に記載される意義を解説した。一部の学生は居残りし、売掛金の概念について反復学習を行う姿勢も見られた。

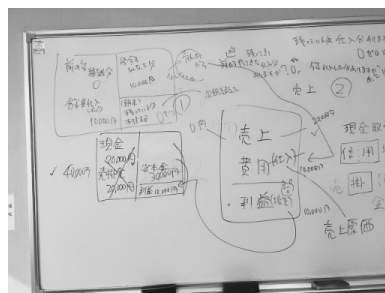


写真4 貸借対照表と損益計算書の関係図

6回目 目に見えるものを使った理解の促進

勘定科目としての「現金」が具体的な硬貨や紙幣ではなく、概念であることを理解させるために、おもちゃの紙幣を再び活用した。ホワイトボードに貼り付け、現物と帳簿記録の対応関係を示した。また、簿記の目的について「お金の管理」という回答があったが、「管理」の具体的な意味を掘り下げ、記帳が必要な理由を丁寧に説明した。

7回目、8回目 学外研修期間中の解説

学生の半数が欠席する期間には、買掛金、繰勘定元帳、会計期間、減価償却といった会計用語や概念を詳しく解説した。特に減価償却については、「タクシー会社の車両は使用後も残るが、消耗する」という具体例を用いることで、比較的スムーズに理解が進んだ。

9回目 復習と総まとめ

7～8回目の内容を復習した後、仕訳が貸借対照表および損益計算書にどのように関連するかを解説した。具体例（実物）を用いて仕訳を行い（写真5）、財務諸表の作成までを講義した。



写真5 具体例（実物）を用いた仕訳

IV (ii) 「簿記会計学」結果

10回目の授業では、小テストを実施し、簿記用語や各種関係性についての記憶と理解度を確認した（図1）。全20問中19問は四択形式で、株主や出資、仕訳の左右、貸借対照表の構成などの設問を出題し、1問は「減価償却」の入力問題とした。平均点は80点で、正答率が最も低かったのは、「売掛金」と「売上」を問う仕訳問題で正答率は50%に留まった。同時に実施したアンケートでは、「簿記・会計の理解が進んだ」と答えた学生が9割を超え（図2）、「楽しく学んでいる」という回答も9割を超えた（図3）。これらの結果から、理解度と学習の楽しさには相関があることが示唆された。

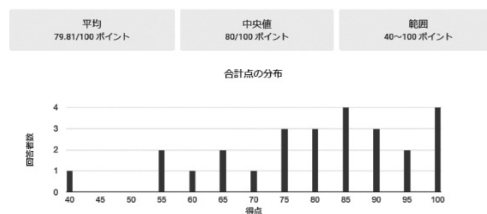


図1 理解度確認テストのバラつき

アンケート(1) これまでの授業で簿記・会計についての理解の自己評価はどうか？
26件の回答

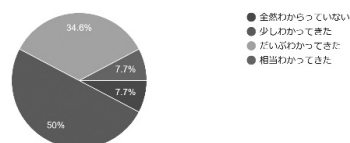


図2 アンケート理解の進捗

アンケート(2) 授業で楽しく経営や簿記・会計について学んでいますか？
26件の回答

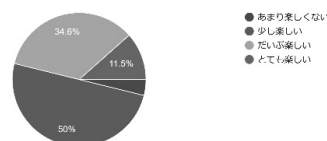


図3 アンケート楽しい学び

V. 考察

授業で最もつまづきが見られたのは、売掛金の処理であった。仕訳を板書させた際に、「売掛金 | 売上」とするべきところを、「現金 | 売掛金」としたり、「売掛金 | 現金」とと記載する例が散見された。これは、現金を受け取っていないため「現金」が減るとの発想に基づくものと考えられる。こうした混乱は、第5回の授業で「売掛金」が初めて出現した際から兆候が見られた。このため、第6回の授業では、おもちゃの紙幣を用いて、それを「現金」という勘定科目名で表現することを再確認した。つまり、「売掛金」という用語に対応する実体が提示されていなかったこと

が、理解を妨げていた可能性がある。

シミュレーション初期段階で、資本金の受け取りと株式発行、株主が会社の所有者であることを具体的に示し、創立費を処理することで権利や費用の概念は認識されたと考えられる。しかし、売掛金などの債権については具体例が不足していた。「お金を受け取る権利」を示す証書などの視覚的な教材を準備し活用することで、売掛金の理解が進む可能性が示唆される。

尚、11回、12回では仮想経営を続け13回から決算処理を行い15回目で配当処理を行う予定である。

Ⅵ. 今後の課題

本授業では、毎回授業終了後に Google フォームを活用し、学生から感想を収集した。これにより、授業への取り組み姿勢や課題点を把握し、進度や難易度を調整している。感想には「難しい」といったネガティブな意見も散見されたが、大半は好意的な内容であった。第1回目と第10回目（小テスト実施後）の感想をユーザーローカルのテキストマイニングツールで分析（注）した結果、授業を通じて学生の関心や理解の深まりが確認できた。

第1回目では、「株主」が最も高いスコアを得ており、「会社の所有者は株主である」という基本概念が強く印象に残ったことが分かる。また、「（わかり）やすい」「～やすい」といったワードが上位に入り、取り組みのハードルが低く感じられていたことが示唆される（図4）。一方、第10回目では「貸借対照表」「売掛金」「買掛金」など、より高度な概念が上位に挙がりつつも、「やりやすい」「面白い」「分かる」といった肯定的なワードが多く見られた。「難しい」という意見もあったが、「悔しい」「復習」といった前向きな意

欲を示す表現が確認され、学びへの姿勢が向上していることがうかがえる（図5）。

これらの結果から、具体的素材を活用し、原理を絞った指導法が学生の「分かる」楽しさを引き出し、簿記会計の学習を肯定的に捉えさせる効果を上げたといえる。最低限の用語と概念を用いることで記憶が定着し、理解が進む授業構成が成功の鍵であった。

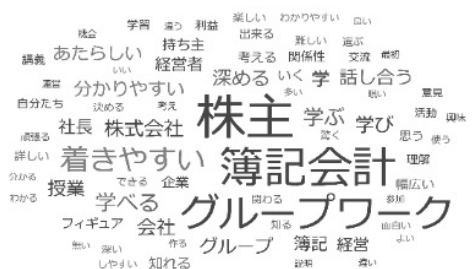


図4 第1回ワードクラウド

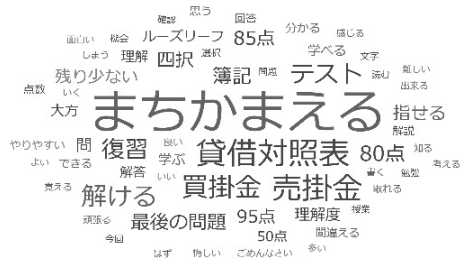


図5 第10回ワードクラウド

一方で課題も明らかになった。記憶の定着度には個人差があり、授業進度を制約する要因となっている。学生間の差を埋めるためにテキストや練習問題集の整備が急務である。また、簿記検定試験を意識するあまり、用語や表現が硬直的になりがちな点も改善の余地がある。たとえば、英語の「仕入」を意味する勘定科目「purchases」に関連し、便宜的に「仕入（品）」といった柔軟な用語を用いることで理解が促進される可能性がある。英

語によって解釈する試みでグローバル化や多様なニーズに応える授業展開も期待できる。さらに、学生の専攻や興味に応じた事例紹介を取り入れること、たとえば、全商簿記と日商簿記で異なる科目名称や運用の違いを説明し、実務や検定試験との関連性を示すことで理解を深められるだろう。

今回の授業は、売掛金・買掛金や減価償却など商習慣上や期間損益の観点から不可欠な概念と用語に焦点を絞ることで成功を収めた。このアプローチを核として、学習進度が速い学生に対しては、同じ時間枠で簿記3級レベルの内容をより深める発展的な授業が可能であると考えられる。今後は、こうした基礎的学びを発展させる指導法を模索し、さらに充実した授業設計を行うことが課題である。

VII. 文献

- 生涯教育のユーキャン. (最終更新: 2024.12).
<https://www.u-can.co.jp/special/theme/worker/?srsId=AfmBOorSXBleCx3ghskJ2Pk223vO-ILmb4yUOT8CPBYc71TFzAT1kD8>
- 日本の資格検定. (最終更新: 2023.12.26).
https://jpsk.jp/articles/ranking2024_1.html
- 日本の資格検定. (最終更新: 2023.12.26).
https://jpsk.jp/articles/ranking2024_3.html
- 就活の未来.
<https://shukatsu-mirai.com/archives/41914>
OfferBox.
(公開日: 2023/06/01, 最終更新日: 2024/11/22).
<https://offerbox.jp/columns/21517.html>
- 河合由佳理, 齋藤雅子. (2020). 「高等教育における簿記学習の現状に関する考察」 駒澤大学経営学部研究紀要, 49, 39-72.
- 手嶋竜二, 金川一夫. (2019). 「簿記の授業における集中力維持に関する研究: 『電卓演習』導入の効果測定について」 九州産業大学商学会, 第59巻第4号.
- 小山峰明. (2007). 「簿記会計指導方法の工夫・改善の取り組み」 島根県立松江商業高等学校教諭, 商業教育資料, 77号.
- 曾場七恵. (2021). 「簿記・会計教育に関する意識調査ー商学部生と社会人の比較を中心にー」 名古屋学院大学論集 社会科学篇, 第57巻第4号, 209-222.
- 河合由佳理 (2), 齋藤雅子. (2019). 「わが国の簿記教材に関する傾向分析」 産研論集, (46), 99-108.
- 沼田嘉穂. (1987). 簿記教科書[再訂版]. 同文館. (初版: 1956).
- 稲盛和夫. (1998). 実学 経営と会計. 日本経済新聞社.
- 寺田誠一. (2002). ファーストステップ会計学. 東洋経済新聞社.
- 早谷準一. (2002). 明解図解これを知れば「決算書のウラ」が読める! 簿記の本質. 千紘社.
- 土方久編著. (2003). 近代会計と複式簿記. 税務経理協会.
- あずさビジネススクール編. (2004). 超図解ビジネス仕訳と勘定科目入門. エクスメディア.
- 友岡賛. (2006). 会計の時代だ 会計と会計士との歴史. ちくま新書.
- 國定克則. (2007). 決算書がスラスラわかる財務3表一休理解法. 朝日新聞社.
- 松原直樹. (2010). 完全図解行動会計. 日本経済新聞社.
- 林總. (2010). ドラッカーと会計の話をしよう. 中経出版.
- TAC 簿記検定講座. (2019). よくわかる簿記シリーズ 合格テキスト 日商簿記3級 (Ver.10.0). TAC 出版.
- 大手町のランダムウォーカー. (2020). 世界一楽しい決算書の読み方. KADOKAWA.
- 近藤哲朗, 沖山誠, 岩谷誠治 (監修). (2021). 会計の地図. ダイアモンド社.
- 登川雄太. (2021). 世界一やさしい会計の教科書. ソーテック社.
- 滝沢ななみ. (2023). みんなが欲しかった簿記の教科書 (第11版). TAC 出版. (初版: 2012).
- (注) ユーザーローカル テキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>) による分析